**〔解　　説〕**

寛延元年(一七四八)八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛(しょうらく)・並木千柳(なみきせんりゅう)の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。

　元禄十四年（一七○一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治(えんや)判官、吉良上野介を高師直(もろのお)、大石内蔵助を大星由良助(ゆらのすけ)などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあります。

　本筋の義士劇の他に、若狭助、本蔵、勘平、天河屋(あまかわや)の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えています。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲です。

**〔あらすじ〕**

**《大　序》**

暦応元年(一三三八)二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることとなります。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分けます。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭助は、兜を宝蔵に納めに行きます。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説きますが、戻ってきた若狭助の機転により、顔世はその場を逃れることができました。怒った師直は若狭助を罵倒、若狭助はかろうじて憤りを抑えます。

**《二段目》**

**〔力弥上使の段〕**塩冶判官の国家老・大星由良助の子息である力弥は、明日の登城時間を知らせる使者として桃井家へやってきます。家老・加古川本蔵の娘・小浪が受け取りに出ますが、許嫁である力弥に見とれてしまいます。そこへ若狭助が出てきて口上を受け取り、力弥は帰って行きます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

　　　　　　　　　　　　　(一般社団法人　義太夫協会発行)

**力弥上使の段**

久方の

空も弥生の黄昏時、桃井若狭助安近の館の行儀掃き掃除、お庭の松も幾千代を守る館の執権職、加古川本蔵行国、年も五十路の分別盛り、上下ため付け書院先歩み来るとも白州の下人

「なんと関内、この間は御上にはでつかちねえ御拵え。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社参、しい御物入り。アヽその金の入り目が欲しい。その金があつたらこの可介、名も改めて楽しむになあ」

「なんぢや、名を改めて楽しむとは珍しい。そりや又何と替える」

「ハテ、角助と改めて、胴を取つて見る気」

「ナニ馬鹿面な。わりや知らねえか。昨日鶴が岡でこれの旦那若狭助様、いかう不首尾であつたげな。子細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めてまた無理を抜かして、御旦那をやり込めをつたであろう」

とさがなき口々

「ヤイ〳〵、何をざは〳〵と喧しい御上の取り沙汰。ことに御前の御病気、御家の恥辱になる事あらば、この本蔵聞き流し置くべきや。禍は下部の嗜み、掃除の役目仕舞うたら、皆行け、行け」

と和らかに、女小姓が持ち出づる煙草輪を吹く雲を吹く、廊下音なう衣の香や、本蔵が奔走の一人娘の小浪御寮母の戸無瀬諸共に、しとやかに立ち出づれば

「これは〳〵、両人共御前のお伽は申さいで自身の遊びか、不行儀千万」

「イエ〳〵今日は御前様、殊の外御機嫌。今すや〳〵と御休み。それでナア母様」

「イヤ申し本蔵殿、先程御前の御物語。昨日小浪が鶴が岡へ御代参の帰るさ、殿若狭助様、高師直殿と詞争ひ遊ばせしとの御噂。モ誰が言ふとなく御耳に入り、それはくきつい御案じ。『夫本蔵、子細詳しく知りながら自らに隠すのかや』と御尋ね遊ばす故、小浪に様子を尋ぬれば、これも私と同じ事。『何も様子は存じませぬ』との御返事、御病気の障り、御家の恥になる事なら」

「アヽコレ〳〵戸無瀬、それ程の御返事、なぜ取り繕ろふて申し上げぬ。主人は生得御短慮なる御生れ付き。何の詞争ひなどとは女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより、身を果たすが刀の役目、武士の妻でないか。それ程の事に気が付かぬか。窘めさ〳〵。ナニ娘、そちはまた御代参の道すがら、左様の噂はなかりしか、但しあつたか。ナニ、ない、ムヽその筈〳〵。ハヽヽヽ何のべしでもない事を。よし〳〵、奧方の御心休め、直に御目に掛からん」

と立ち上がる折こそあれ当番の役人罷り出で

「大星由良助様の御子息、大星力弥様御出でなり」

と申し上ぐる。

「ムヽ、お客御馳走の申し合はせ、判官殿よりの御使ひならん。こなたへ通せ。コレ戸無瀬、その方は御口上受け取り、殿へその通り申し上げられよ。御使者は力弥、娘小浪と言号の聟殿、御馳走申しやれ。まづ奧方へ御対面」

と言ひ捨て一間に入りにける。戸無瀬は娘を側近く

「ノウ小浪、父様の堅苦しいは常なれど、今仰つた御口上、受け取る役はそなたにとありそな所を戸無瀬にとは、母が心とはきつい違い。そもじも又力弥殿の顔も見たかろ、逢ひたかろ。母に代つて出迎や、ヤ。嫌か、嫌か」

と問ひ返せば

『アイ』とも『嫌』とも返答は、赤らむ顔のおぼこさよ。母は娘の心を汲み

「アイタ〳〵。娘、背を押してたも」

「これは何と遊ばせし」

とへ騒げば

「イヤノウ今朝からの心遣ひ、また持病の癪が差し込んだ。アイタ、これではどうも御使者に逢はれぬ。アイタ、娘、大儀ながら御口上も受け取り、御馳走も申してたも。御主と持病には勝たれぬ、勝たれぬ」

とそろ〳〵と立ち上がり

「娘や、随分御馳走申しや、ヤ。したが余り馳走過ぎ大事の口上忘れまいぞ。わしも聟殿に、アイタ〳〵、逢ひたかろう」

の奥様は、気を通してぞ奧へ行く。小浪は御後伏し拝み〳〵

「忝ない母様、日頃恋し床しい力弥様、逢はゞどう言

を、かう言を」

と娘心のどぎ〳〵と、胸に小浪を打ち寄する、畳触りも故実を糺し入り来たる大星力弥、まだ十七のや、二つ巴の定紋に、大小立派さはやかに、さすが大星由良助が子息と見えしその器量、しづ〳〵と座に直り

「誰そ、お取次頼み奉る」

と慇懃に相述ぶる。小浪は『はつ』と手をつかえ、ぢつと見交はす顔と顔、互ひの胸に恋人と物も得言はぬ赤面は、梅と桜の花相撲に、枕の行司なかりけり。小浪胸押し鎮め

「これは〳〵御苦労千万にようこそ御出で。只今の御口上受け取る役は私、御口上の趣きをお前の口から私が口へ、直に仰つて下さりませ」

と擦り寄れば身を控へ

「ハア、これは〳〵不作法千万。惣じて口上受け取り渡しは行儀作法第一」

と畳を下がり手をつかへ

「主人塩谷判官より若狭助様への御口上。『明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈のところ、定めて御客人も早々に御出であらん。然れば判官若狭助両人は、正七つ時にきつと御前へ相詰めよと、師直様より御仰せ。万事間違いのなき様に、今一応御使者に参れ』と主人判官申し付け候故、右の仕合はせ。この通り若狭助様へ御申し上げ下さるべし」

と水を流せる口上に、小浪はうつかり顔見とれ、とかう答へもなかりけり。

「オヽ聞いた〳〵。使ひ大儀」

と若狭助、一間より立ち出で

「昨日お別れ申してより、判官殿間違うて御目に掛からず。成程正七つ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦労千万と、宜しく申し伝へてくれられよ。御使者大儀」

「ハヽア、然からば御暇申し上げん。ナニ、お取次の女中御苦労」

としづ〳〵立つて見向きもせず、衣紋

（繕ひ立ち帰る）